

抱井 尚子（青山学院大学国際政治経済学部教授）

本日は、お招きいただきありがとうございます。今回は混合研究法の理論の概要をというご依頼をいただきましたので、ポイントを絞って基本のお話をさせていただきます。

本題に入る前に、まずはこのスライドを御覧ください。ここには JSMMR<sup>1)</sup>、つまり日本混合研究法学会と、MMIRA<sup>2)</sup>、つまり国際混合研究法学会 "give many thanks to Rits!" と書かれております。実は日本における混合研究法発展の歴史において、こちらの立命館大学さんが果たされた役割は大きいのです。日本混合研究法学会の第 1 回の大会は、国際大会でもある日本初の混合研究法の学術集会でもあったわけですが、ここ立命館大学のいばらきキャンパスで開催されました。これは 2015 年開催の大会だったのですが、2014 年に国際混合研究法学会の方でも第 1 回の国際大会を米国ボストン・カレッジで開いており、そのときの参加人数が 300 人に満たなかったところ、なんと立命館大学では 350 人近い方たちが参加してくださり、日本における混合研究法に対する関心の高さを窺わせるものでした。

引き続き 2017 年にも、隔年で開催している国際大会を、再びこちらのいばらきキャンパスの方で開催させていただきました。この写真は立命館大学政策科学部の稲葉先生と、混合研究法の専門家として日本では最も著名な John Creswell 氏です。お二人がお話しをされている写真です。ということで、稲葉先生はじめ立命館大学いばらきキャンパスの多くの皆様には、日本混合研究法学会と国際混合研究法学会関係者が大変お世話になっております。そのことを、この場をお借りして改めて御礼申し上げたいと思います。

## JSMMR & MMIRA give many thanks to Rits!



日本における混合研究法発展の歴史において、立命館大学が果たした役割は非常に大きい。

© 2019 by Hisako Kakai

それでは本題に入りたいと思います。私はこれまで、混合研究法についていろいろなところでお話しをさせていただいているのですが、そのときにまず冒頭で伺うのが皆さんの主たる研究アプローチです。皆さんに挙手でお答えいただきたいのですが、メインとなる研究アプローチが量的研究、質的研究、混合研究法、または研究は未経験というこの4つのうち、1つを選んで手を挙げていただけますでしょうか。それでは量的研究が主たる研究アプローチである方は手を挙げていただけますか。ありがとうございます。では質的研究の方。ありがとうございます。では混合研究法を使っていますという方。ありがとうございます。それでは最後に、研究に関しては未経験です、これからですという方。はい、ありがとうございます。

この会場では、やはり主に質的研究をなさっているという方が圧倒的に多いようですね。ただ、今回この混合研究法の講演に参加されているということは、質をやっている方が量をやっている方が、または研究は未経験という方でも、両方使って研究してみたい、両方使うことに関心があるという方がお集まりになっておられるのかなとお見受けします。それでは、混合研究法のお話をさせていただきます。

## 1. 混合研究法統合のトリロジー

こちらにある三角形ですが、これは混合研究法統合のトリロジー（三部作）と呼ばれるもので、先ほども稲葉先生の方からインパクトファクターが非常に高いということでご紹介があった、混合研究法の専門国際ジャーナル *Journal of Mixed Methods Research* の共同編集委員長である Mike Fetters 先生と Molina-Azorin 先生のお二人による編集記<sup>3)</sup> から引用させていただいたものなのです。混合研究法を図で表すと、ちょうどこのような三角形になるとお考えいただければと思います。混合研究法は 3 部でできています。まず一番底辺の部分、Philosophical ということで哲学的な柱があります。そして Methodological ということで、方法論的柱が 2 本目にあります。そして最後が Methods、つまり方法的柱です。これらの 3 つの柱により混合研究法が成り立っているということを頭の中に置いておいていただきたいと思います。それでは一つひとつの柱に焦点を絞ってお話をさせていただきます。

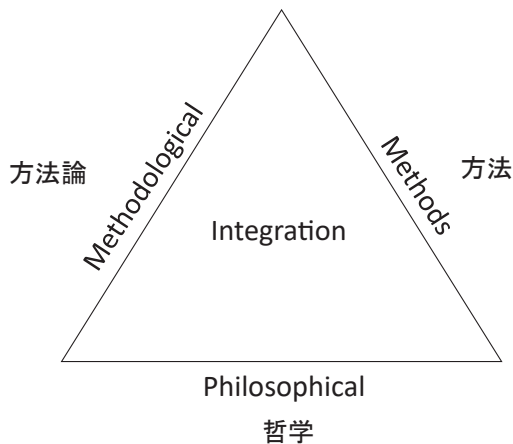


図 1. 混合研究法統合のトリロジー

Fetters & Molina-Azorin (2017, p.292) をもとに作成

## 2. 哲学的柱

まずは哲学的柱です。研究になぜ哲学が必要なのかと思われる方が多いかもしれませんが、研究と言ったときにまず哲学ということを意識される方は、量的研究者よりも質的研究者に多いのではないかと思います。私はアメリカで Ph.D. の学位を取得したのですが、研究法について学んでおりましたときに、量的研究のテキストではあまり見られない哲学的視座に関する章が、質的研究のテキストを開くと最初に配置されているのです。最初のチャプターが哲学的視座なのです。

なぜ質的研究のテキストに関しては哲学的視座から始めなければいけないのに量的研究のテキストはそれが必ずしも一般的ではないかということ、量的研究の哲学的視座というものが人間科学や社会科学においては優勢だからなのです。つまり、実証主義の修正版として第二次世界大戦後に現れた、量的研究の哲学的視座であるポスト実証主義も、複数存在する多様な哲学的視座の一つに過ぎないにもかかわらず、この視座がもつ存在論、認識論、方法論、価値論といったものがいわば「標準」とされているため、敢えてこれらを説明する必要がないというわけです。

ご存知のように量的研究を行う場合、誰かにそれを承認してもらう必要はないのです。量的研究が当たり前の世界ですから。つまり、どうして「量」で研究をやらないのかと批判されることはあっても、「量」で研究をやって批判されることはないということです。このことは、前で触れましたように、ポスト実証主義の哲学的視座に基づいた量的研究がいかに社会科学、人間科学の研究において優勢であるかということを表しているわけです。

それでは、ポスト実証主義の視座に基づいて量的アプローチで研究を行わない質的研究者はどうしているかということ、まずは量的研究者に対して、私たちはこのような理由から、このような哲学的視座にもとづいて質的なアプローチで研究を行うのですと、いちいち自分たちの研究アプローチの正当性について説明しなければならないわけです。その説明ができるようになるために質的研究のテキストの最初の章は、多様な質的アプローチを支える哲学的な視座について解説するものになっているわけなのです。

## 2.1. 「パラダイム論争」は混合研究法の生みの親

次のスライドで「パラダイム論争は混合研究法の生みの親」とありますが、このパラダイム 論争というのは、1980 年代を中心に展開した質的研究者と量的研究者のそれぞれの研究アプローチの優位性をめぐる論争でした。実のところ量的研究、質的研究の優位性を争うというよりは、その背景にあるポスト実証主義と、構築主義、社会構成主義、解釈主義といった質的研究を支える視座の間で展開されたバトルだったわけです。

だいたい 70 年代の終わりぐらいからこのパラダイム論争が始まって、90 年代に入っても尾を引いていました。私がアメリカのハワイ大学で博士課程後期を始めたのが 90 年代の中ごろでしたので、まだこの論争の余韻は残っており、博士課程後期の学生が必ず履修しなければならない登竜門のような「知識構築」という授業の中で、質的研究者と量的研究者のそれぞれによって書かれた、自身の研究アプローチが人間科学の研究にいかにか適しているか、優れているかという議論を取めた大量の論文を毎週毎週読まされたものでした。来る日も来る日も、こういった論争を読まされて辟易したものでした。資源（紙）と時間の無駄遣いと思ったものです。

今になって振り返ってみますと、この論争に学生として巻き込まれたことにより、量的研究に関しても質的研究に関しても、研究法全般について深く学ぶことができたと思います。ですから、混合研究法という新しいアプローチを理解するうえでも、この経験が非常に役立ったと思います。ただ、質的・量的両陣営の戦士（研究者）たちによる熱い議論を読むたびに、どちらのアプローチも一長一短がある中でなぜどちらか1つを選ばねばならないのかと、このような議論そのものに不毛感を覚えたものでした。学生である私でさえそのように感じたわけですから、研究者として既に第一線で活躍されておられた一部の方々が抱いたフラストレーションは比ではなかったでしょう。そして、この非生産的な状況に終止符を打つべく、アンチ・パラダイム論争の立場を採った研究者たちが立ち上がって生まれたのが、現在の混合研究法のコミュニティであったというわけです。

## 2.2. 哲学的視座 = 世界を観る窓

先ほど哲学的視座が重要だというお話をしましたが、なぜこれが重要かという、哲学的視座というのは世界を観る窓だからです。ここで使われる「パラダイム」という言葉ですが、これは Thomas Kuhn による『科学革命の構造』(1962) のパラダイムにルーツをもつものですが、厳密には少々意味合いが異なります。パラダイム論争と関わりの深いパラダイムという概念は、「世界観」(worldview) という言葉に置き換えることができます<sup>4)</sup>。どの窓から外を覗くかによって、見えてくる景色も違ってくるわけです。ですから、量的研究を支える哲学的視座、つまりポスト実証主義の窓から現象を見たときと、構築主義や社会構成主義といった質的研究のアプローチを支える哲学的視座の窓から外を見たときとでは、見えてくる景色が違うというわけです。その点について自覚的になるというのが、混合研究法における初めの一步として大切になってくるわけです。

パラダイム論争での議論が、具体的にどのような問題について為されたのかを知るうえで重要になるのが、「存在論」、「認識論」、そして「方法論」といった、哲学的問いということになります(表1参照)。パラダイム論争は、実際には、これら哲学的問いに対する前提の違いに依拠して量的研究者と質的研究者の間で起きたものです。それでは、簡単にご説明させていただきます。

いわゆる社会構成主義ですとか構築主義というのは、リアリティもしくは実在というものは多元的であると考えます。その多元的リアリティを研究者と研究参加者の間の相互作用を通して理解していくことが重要だと考えるわけです。だからこそ、研究の目的がいわゆる 5W1H と言われるような、「何が」(what) とか「どのように」(how) とかといった開かれたものになり、研究の手続きについてもインタビューを通して記述的なデータを収集・分析していくということになります。

一方で量的研究の場合は、1つの社会的リアリティが個人の知覚とは無関係に存在するという考えに基づき、そうであれば人間の行動の法則というものを見出すことができるという前提に立つわけです。そうなると、それではその法則を我々が発見するためにはどうしたらよいか、そのためにはできるだけバイアスを排除し、客観的に現象を捉えていかなければいけないということにな

表 1. 質的研究と量的研究アプローチの比較<sup>5)</sup>

	主観的 ←	→ 客観的
<b>存在論:リアリティの本質は何か</b>	<b>質的研究アプローチ</b> 社会的リアリティは多元的である。	<b>量的研究アプローチ</b> 外在する社会的リアリティが存在する。
<b>認識論:どのような知識を知り得るか、誰がそれを知り得るか</b>	多元的リアリティを理解することが目的。 研究参加者は「専門家」である。 間主観性を通して、人間行動を理解する。 知識構築における、主観的・客観的という二元性を否定。	・客観的な社会調査を通じて、人間行動を予測し、その法則を明らかにする。 ・「唯一の真実」を究明することが目的。
<b>方法論:どのように知識は生産され得るか</b>	研究の目的は、「何が」、「どのように」、「なぜ」に対する)理解を深めること。	独立変数と従属変数の関係に関する言明。質問は仮説の形で提示される。
・質問のタイプ		
・収集するデータのタイプ	自然的状況においてデータを収集する。参与観察(フィールドワーク)、深層インタビュー、フォーカスグループ、文書など。	質問紙、実験、ランダム化比較試験、メタ分析
・分析のタイプ	帰納的:理論構築を目指す。データの中にある一般的なテーマやパターンを探す。「厚い記述」を用いる。テーマに関するデータを比較対照する。グラウンデッド・セオリー、ナラティブ分析。	演繹的:仮説を検証する。独立変数をコントロールすることで、従属変数のばらつきを説明する。統計的測定に重点が置かれる。
・目標	「プロセス」の理解	研究結果の一般化、予測、そしてコントロール

Hesse-Biber et al. (2015, p. 5) をもとに一部改変して作成

る。したがって、客観的に集められた量的データを統計的に分析しましょうという考え方になっていくわけです。ですから、実験研究や質問紙調査による量的研究を実施することになるわけです。

このように、それぞれを支える哲学的前提が水と油ほどに異なる質的研究と量的研究には、トーマス・クーンの言うところの「共約不可能性 incommensurability」という「二つの異なる体系同士に共通の物差しをあてがうことができない」という問題が生まれ、研究法の文脈においては、質的・量的研究は統合することができないという結論に達してしまう。この共約不可能性の問題が、単一のプロジェクトの中で質と量の2つのアプローチを使用することを妨げたというわけです。

### 2.3. パラダイム論争の弊害

ここでパラダイム論争の弊害についてお話をさせていただきます。立命館大

学で 2015 年に開催された国際混合研究法学会アジア地域会議・日本混合研究法学会第 1 回年次大会の基調講演者のお一人であり、国際混合研究法学会の 2 代目の理事長であった、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）の Pat Bazeley 氏は、講演の中で、「1970 年代、シカゴ学派社会学のアプローチに倣い、観察調査・インタビュー調査・質問紙調査といった多様な研究アプローチを用いて私たちは研究を実施していた。しかし 80 年代、90 年代は、パラダイムを推奨する十字軍の圧力によって、私たちの一部がそれまで何年もの間問題なくやってきたことができなくなってしまった」とおっしゃっているわけです。

つまり 1 つのプロジェクトの中で質的・量的研究アプローチをともに用いることは、何もいま始まったことではなく、これまでずっと行われてきたことなのです。シカゴ学派の社会学者たちは都市研究で両方の研究アプローチを使用していました。また、社会心理学研究においても、Festinger や Milgram といった 1950 年代・60 年代に活躍した名だたる研究者たちが両アプローチをともに用いていました。もちろん文化人類学でも利用されてきたアプローチなのに、このパラダイム論争の勃発によって、これまで問題なく行われてきた研究実践が続けられなくなってしまったという、そういう歴史的弊害があったわけなのです。

#### 2.4. 混合研究法を支える多様な哲学的視座

以上のように、パラダイム論争の勃発とともに、量的・質的研究アプローチを単一の調査プロジェクトの中で併せて用いるという、長年にわたり当たり前のよう使用されてきたアプローチが禁じ手となってしまったわけですが、先述したように、この不毛な状況を打開しようと立ち上がった研究者たちによって混合研究法（mixed methods research）と呼ばれる第三の研究アプローチ<sup>6)</sup>が誕生しました。そして、混合研究法のコミュニティが自分たちの方法論を支えるパラダイムとして選んだのがプラグマティズム<sup>7)</sup>でした。

プラグマティズムとは、ひとことで言ってしまえば、存在論、認識論、方法論といった形而上学的な話はとりあえず脇に置いて、まずは知識の有用性を重視しようという考え方です。有用な知識が得られるのであれば、量的研究



と質的研究を併せて用いることに問題はないとするプラグマティズムを哲学的パートナーにする研究者が混合研究法では非常に多いといえます。近年は、その他にも、社会的弱者のアドボカシーを目的とする変革のパラダイム<sup>8)</sup>、批判的実在論<sup>9)</sup>、多様なパラダイムを有するステークホルダーがチームとして協働するための弁証法的多元主義<sup>10)</sup>といった、様々な哲学的視座が混合研究法の実践を支えています。

混合研究法を実施する研究者は、一般的に、ポスト実証主義の哲学的視座に立脚する量的研究主導型混合研究法から、構築主義に立脚する質的研究主導型混合研究法まで、認識論的連続体上で自分の立ち位置がどこにあるのかを明確にした上で研究を実施することが奨励されます。ということで、現在の混合研究法コミュニティは認識論的多様性に富む共存のコミュニティといえます。ですから、「純・質的研究」から「純・量的研究」までの連続体上に、「質的研究主導型」や「量的研究主導型」の混合研究法が存在し、2つの中間には「純・混合研究法」が存在するわけです。こういった認識論的パリエーションが現在の混合研究法には存在するわけです。

## 2.5. 混合研究法ムーブメントの発生

先程、変革のパラダイムという哲学的な視座があることに触れましたが、これを最初に提言されたのは米国ギャロデッド大学名誉教授で教育評価研究者の Donna Mertens 氏です。この方は *Journal of Mixed Methods Research* の前編集委員長だった方です。この方が変革のパラダイムとおっしゃっているのは、簡単に言ってしまうと社会的弱者のアドボカシーや開放、権利向上のために混合研究法を使いましょうということで、変革的混合研究法を提唱されておられます。ですから CBPR (Community Based Participatory Research) またはコミュニティを基盤とする参加型リサーチをやられる方たちがよくこのパラダイムを使用して混合型研究を実施しておられます。

そしてこの Mertens 氏が大変興味深いことをおっしゃったのです。2018 年に彼女を青山学院大学に招聘しセミナー<sup>11)</sup>を実施していただいたのですが、その際に彼女が共有してくださった経験が今でも私の心に深く刻まれています。私自身も例外ではありませんが、2000 年以前に人間科学の分野において

研究法のトレーニングを受けた者は、典型的にはまず量的研究から入っていくわけですが、むしろ、量的研究のトレーニングしか受けないというのが、当時は一般的だったのです。量的研究のトレーニングしか受けていなかった Mertens 氏は彼女のキャリアの早い段階で量的研究者として社会的に周縁に追いやられたコミュニティ、つまり貧困地域を量的に調査する仕事に就いたそうです。その仕事は、調査で得たデータの分析結果を米国議会による政策決定の材料として提供するというものだったそうです。

その後、質的研究者の Egon Guba の影響もあり、研究対象となるコミュニティに深く入り込んで彼らの文化について知ることにもせずに、ただ数字だけを出して報告するのは危険なことではないかと感じ始め、実際にコミュニティに入って質的調査を実施してみたそうです。すると、そこから見えてきたものにショックを受けたそうです。社会の周縁に追いやられた人々の生きる文脈を、質的調査を通して知ることによって、今まで自分がやってきたことは何だったのかと鳥肌が立ったとおっしゃったのです。Mertens 氏は、このように研究対象の文脈を知らずに、コミュニティの現状というものを理解せずに、ただ数字だけ出して、しかもそれを米国議会に対する政策提案につなげる資料として提出してしまっていたことに鳥肌が立ってしまったというわけです。そして研究参加者の経験を当事者の視点から理解することなしに量的データを解釈することの危うさを、身をもって経験したというお話をされていました。

ここで Mertens 氏が強調していたのは、混合研究法を用いることを可能にする複数のパラダイムが現在存在していることです。今現在の混合研究法のパラダイムの有り様を彼女は、"the anti-paradigm war (アンチ・パラダイム論争) / the anti-war paradigm (アンチ論争パラダイム)"と呼んでいるのです。つまり多様なパラダイムが併存している、ケンカをせずに共存している、これが現在の混合研究法コミュニティの在りようだとおっしゃっているのです。

## 2.6. 研究者のパラダイムと研究評価規準の不可分な関係

混合研究法を用いて研究を実施する上で、パラダイムは非常に重要だと私は考えます。ポスト実証主義のパラダイムであればリアリティというのは1つということになります。構築主義のパラダイムであれば多元的リアリティがあ

る、多様なリアリティがある。このように哲学的前提に多様な考え方がある中で、すべての研究を同じ規準で評価できるかといえば、それは難しいかと思えます。何より公平性に欠けると思えます。サンプルサイズ、一般化可能性、こういったものはいわゆるポスト実証主義で重要視されるもので、これらの概念は必ずしも構築主義の視座からは研究において重要視されていません。ですからよくあることですが、非常にサンプルサイズの少ない質的研究論文をジャーナルに投稿すると、サンプルサイズが少ないことを理由に受理されないという状況に陥ることがあります。量的研究の掲載頻度が高いジャーナルに質的研究論文を投稿した場合、上記のような状況に陥る可能性が高くなると思えます。何年も前のことになりますが、インタビュー調査の結果をまとめて海外のジャーナル（学際的ジャーナルで量的研究の掲載が一般的）に投稿したところ、1年近く査読結果が出るまで待たされた挙げ句、「サンプルサイズが・・・」というコメントとともに不採択の通知が戻って来たことがありました。長い間かけてやっと査読者が見つかったのかもしれませんが、これだけ待たされて不採択なのであれば、編集委員長の裁量で瞬時にデスクリジェクションして頂きたかったというのが本音のところではあります。

ということで、研究を実施する際には、その入り口がパラダイムとなり、出口が研究の評価規準になるのではないかと私は思うのです。ですから私は、研究論文を執筆する際に、このパラダイムというものを、つまりどの視座に立って自分はこの研究を行っているのか、どの窓から研究対象となる現象を覗き込んでいるのかを、出だしの部分で明言しないと適切な規準を用いて研究を評価していただけないのではないかと思うのです。

研究実践を支えるパラダイムを理解していない場合、研究者自身は調査を進める上で重要となる手続き的ポイントを外してしまうかもしれませんし、研究を評価する査読者は研究結果をどのような基準から評価すれば良いかがわからないという状況に陥りかねません。つまり、研究を実施する上で研究者が採用したパラダイムと、そのパラダイムに立脚して実施される研究の手続きおよび結果を評価する基準の間には、不可分な関係があるといえるでしょう。

### 3. 方法論的柱

次は 2 本目の柱、「方法論の柱」についてお話を致します。

#### 3.1. 質的・量的研究の違い～対象を見る 2 つの目線～

ご存じのように量的研究と質的研究では、対象を観る目線が違います。量的研究の場合は脱・文脈的な普遍的法則の発見を目標とするのに対し、質的研究の場合は特定の文脈における人間の主観的経験の理解や記述を目標とします。また、量的研究は、鳥の目線または上空からのスナップショットのようなもので、細部の多様性は把握しにくいものの、視野が広いので全体的な傾向を捉えることができるという特徴をもっています。一方、質的研究は、ストリートレベルの動画みたいなもので、視野は狭いが細部の多様性や時間の経過に伴う変化を把握できるという特徴をもっています。このように異なる 2 つの視点を合わせるのが混合研究法ということになります。2 つの異なる視点をいかに統合するのが、混合研究法の方法論にあたる部分の議論ということになります。

#### 3.2. 1+1=3

立命館大学いばらきキャンパスで 2015、2017 年に開催された混合研究法の国際大会で大会委員長を務められ、現在 *Journal of Mixed Methods Research* の共同編集委員長でいらっしゃるミシガン大学医学部教授・同大学混合研究法研究所共同所長の Mike Fetters 氏は、2015 年の *Journal of Mixed Methods Research* 編集記<sup>12)</sup>において混合研究法を「 $1 + 1 = 3$ 」という数式で表しておられます。これは何かというと、1 というのが統計的傾向を見る量的データを表し、もう一方の 1 がストーリーや個人の経験という質的データを表します。この 1 と 1 を足して 2 になってしまっただけは混合研究法とはいえません。

量的・質的データを統合するとどのようなことが可能になるかということ、どちらか一方のデータのみを使用したときには得られなかったであろう、研究課題に対するより良い理解、つまりシナジーの知や創発的な知を導き出すことができるようになります<sup>13)</sup>。このシナジーの知を混合研究法の専門用語では「メタ推論」と呼びます。メタ推論は、「混合型研究の質的工程および量的工程の結果から得た推論の統合を通じて生成される結果のこと」(Tashakkori &

Creswell cited in Teddlie & Tashakkori, 2009 / 土屋・八田・藤田訳, 2017, p.110)<sup>14)</sup>と定義されます。メタ推論は混合型研究の「結果」にあたり、1と1を足し合わせることで得られる「3」にあたるものです。

それではなぜ、心理学を始めとする人間科学の分野においてこれまで行われてきた尺度開発を目的とするような質的・量的アプローチの併用を混合研究法とは呼ばないのでしょうか。1つの理由としては、これまで行われてきた研究においては、量的なデータが飽くまで一義性を有しており、質的データについては「予備調査」という名のもとに背景に留められることが多かったという点が挙げられるでしょう。混合研究法の場合は1と1ですから、量も質も両方に対して同等の価値を認めます。むしろ、質的・量的データの価値を等しく認め、それぞれがもたらす貢献を統合することによって、これまで単一のメソッドでは知り得なかったシナジーの知を意識的に探究しようとする研究者の意識や態度が混合研究法の実践を特徴づけているといえるでしょう。

### 3.3. 混合研究法の鍵要素

混合研究法の紹介をさせていただくときに、このアプローチの論理そのものは決して難しいものではないことを私は強調しております。確かに、実際に混合研究法を用いて調査を実施する際には、思いも寄らない難題にぶつかることは多々ありますので、この研究アプローチを実践することそのものが容易であるとは決して申しません。しかし、必ず押さえておくべき鍵ポイントはそれほど多くないと思います。

混合研究法を実施する上での鍵ポイントは3つあると私は考えます。研究を実施する前段階として検討する哲学的視座または理論的視座の特定という点を含めれば、実際には4つの鍵ポイントがあるかと思います。研究の出発点としての哲学的または理論的視座の特定は大変重要ですが、これについては先程ご説明させていただきましたので、この点以外の3つの鍵要素についてここではお話させていただきます。

第1の鍵要素は、研究の目的またはリサーチクエッションを明らかにすることです。ここでは、混合研究法を使用することが研究目的に合致するか否かを、改めて検討する必要があります。さもないと、時間と資源を無駄遣いし

た上に研究目的は果たせずという、残念な結果に終わってしまう可能性があります。第2の鍵要素は、研究目的を達成するためやりサーチクエスチョンへの解を得るために、量的・質的データをどのタイミングでどのように収集・分析するかということを検討することです。これはつまり、混合研究法のどのようなデザインを使用するかに関する決定ということになります。そして第3の鍵要素は、量的データと質的データをどのように統合するのかを検討することです。そして、研究目的やりサーチクエスチョンが決まると、自ずとデザインも決まってくるのです。デザインが決まれば、今度は自ずと統合の方法も決まってくるというわけです。このように、混合型研究実施のプロセスにおいては、それぞれの鍵要素が有機的に連鎖していると考えていただければよろしいかと思えます。

#### 3.4. 混合研究法を用いる5つの理由

それでは、どのような目的に混合研究法を使うべきなのでしょう。混合研究法の古典的論文として位置づけられている、教育評価研究者のGreeneらによる1989年の論考<sup>15)</sup>は、混合研究法を用いる主な目的には大きく分けて次の5つがあると議論しています。それらは、(1)「トライアングレーション (triangulation)」(量的データと質的データの分析結果が収斂するかを確認する目的)、(2)「補完 (complementarity)」(一方のデータを、もう一方のデータで補完する)、(3)「発展 (development)」(尺度や介入プログラムの開発を、質的データ分析から得た結果に基づき実施し、開発した尺度の妥当性・信頼性や介入プログラムの効果を、さらに量的データを用いて検証する)、「手引き (initiation)」(質的・量的データ分析の結果の齟齬をきっかけに、新たな研究設問を立てる)、「拡張 (expansion)」(複数の異なる調査段階において様々な分析的アプローチを用いることで、研究の幅を広げてその規模を拡張する)といった目的があります。ただし、これら5つのうち、「トライアングレーション」を目的とすることは、統合分析の強み(シナジー)を得るために混合研究法を用いるという観点からはあまり有益ではないという指摘もあります<sup>16)</sup>。

### 3.5. 混合研究法デザイン

研究目的やリサーチクエスチョンが決まれば、今度はデザインが決まります。デザインには基本型と応用型の大きく分けて2つの分類があります。応用型デザインは、基本型デザインが複数組み合わせさせたものになります<sup>17)</sup>。

まず、基本型には量的・質的データの両方をそれぞれ独立して収集・分析する収斂デザインと、どちらか一方のデータ分析の結果に基づいてもう一方のデータ収集・分析が行われる順次デザインの2種類があります。順次デザインはさらに説明的順次デザイン（量的データ分析の結果を深化するために質的データ収集・分析が実施される）と探索的順次デザイン（質的データ分析の結果をもとに、尺度や介入プログラムを開発し、その妥当性・信頼性や効果を量的に検証する）があります。

応用型デザインには、介入デザインや、特定の介入プログラムについて長期にわたって評価研究を実施する際の多段階評価デザイン、地域に基づいた参加型リサーチ（CBPR）、事例研究デザインなど、様々なデザインがあります。

例えば、介入デザインは介入の事前・事後に収集された量的データを比較することで、介入の効果を検証するものですが、その際質的データを補助的に使用する（混合研究法では、このようなデータの補助的使用を「質的データを“埋め込む”」と表現する）ことによって、量的研究結果のみでは知り得ない、重層的な知を得ることを可能にします。介入デザインでは、理論的には、質的研究を3箇所埋め込むことができます。1カ所目は、介入試験の事前テスト実施前に質的データを収集することで、介入プログラムの開発に役立てたり、介入への参加者を決定するといった目的に質的データの分析結果が使えます。この部分は、基本型デザインの探索的順次デザインになっています。そして、介入試験の最中には、研究参加者にジャーナルをつけていただくことで、研究者の影響を最小限にコントロールしながら質的データを収集します。この部分は、基本型デザインの収斂デザインになっています。そして、介入終了後には、研究参加者に介入の経験について語ってもらうことで、介入のどのような部分が効果的だったか、どのような部分はあまり効果的ではなかったかなど、効果の有無に影響を与えた要因を探ることができます。そして、この部分は、基本型デザインの説明的順次デザインになっています。

### 3.6. 統合の方法

混合研究法のデザインが決まると、量的データ分析結果と質的データ分析結果の統合の方法が決まります。どのような目的のために量的データを収集するのか、どのような目的のために質的データを収集するのか、それらを検討することで統合の方法は自ずと決まってくるわけです。Creswell<sup>18)</sup> は、量的データと質的データの分析結果を比較する（収斂デザイン）目的であれば、統合の方法は「結合」であり、量的データ分析の結果を説明するために質的データを収集・分析する（説明的順次デザイン）目的であれば、統合の方法は「説明」となり、尺度や介入プログラムの開発のために質的データ分析の結果を用いる（探索的順次デザイン）目的であれば、統合の方法は「積み上げ」となると説明しています。また、先程ご説明した介入デザインのように、一方のデータをもう一方のデータによって補強する（介入デザイン）目的であれば、統合の方法は「埋め込み」ということになります。

## 4. 方法的柱

最後の柱はメソッド、方法の柱ということになります。メソッドということで、いわゆる手続きの話になっていくわけです。量的研究に関しても質的研究に関しても、それぞれに特徴的なデータ収集・分析の戦略がありますが、ここにおられる皆さんはそれらについて十分ご存知かと思います。したがって、ここでは混合研究法に特徴的な戦略についてのみお話をさせていただきます。

### 4.1. ジョイントディスプレイ

混合研究法において核となる概念が「統合」であることは既にお話させていただきました。最近では、この統合を可視化するためのジョイントディスプレイ（joint display）と呼ばれるツールの使用が強く奨励されております。ジョイントディスプレイとは、一言で定義するならば、量的・質的データ収集の両方から得られた結果を示す表またはグラフのことです<sup>19)</sup>。

ジョイントディスプレイには、次の3つの特徴があります。第1にジョイントディスプレイによって研究者は、1つのプロジェクトにおける質的・量的工程のデータ収集および結果を、表・マトリックス・図の形で並置して表現する



ことができます。第2に、質的・量的工程を横断して共通する概念やドメインについての関連性をジョイントディスプレイによって示すことができます。そして第3に、質的・量的データ分析結果を統合することで得られるメタ推論と呼ばれる解釈を導き出すことを、ジョイントディスプレイが支援します<sup>20)</sup>。

最近の *Journal of Mixed Methods Research* には、様々に工夫が凝らされたジョイントディスプレイが掲載されるようになってきています。ジョイントディスプレイの議論が現在ほどさかんでなかった頃には、これを論文の中に必ず含めなければいけないという共通認識はありませんでした。したがって、多くの研究者が、量的・質的データ分析結果の統合結果（メタ推論）を文章により提示するナラティブアプローチ<sup>21)</sup> を採るのが一般的でした。しかし現在は、このジョイントディスプレイこそが混合研究法の核である「統合」を具体的に可視化するツールであるという認識が高まりつつあります。

#### 4.2. 計画・分析・報告ツールとしてのジョイントディスプレイ

図1で示されたものがジョイントディスプレイの1つの例です。前述のとおり、ジョイントディスプレイは研究を計画するときや、メタ推論を導出するための分析ツールとして、また、研究結果の報告ツールとしても使えるわけです。まず量的データ分析の結果を一番左側の列に、質的データ分析の結果を中央の列にそれぞれ記載し、これら2つのデータ分析の結果を相互にリンク・比較し、そこから得られた解釈を右端の列にメタ推論として記載するということになります。

ジョイントディスプレイの作成に適したデータ分析における統合戦略例としては、量的または質的データ分析の結果に基づき研究参加者を特定のグループに分類し、それぞれのグループに属する人々の語りや、尺度などを用いて測定された得点にどのような特徴があるかを明らかにするというものがあります。これらは「対象比較型ジョイントディスプレイ」の例ということになり、典型的には収斂デザイン用のジョイントディスプレイになります。例えば、左側の列に箱ひげ図によって数量的データのばらつきを視覚的に示し、中央の列には四分位数のどこに位置する人がどのような特徴的な語りを有しているのかを示し、これら2つの列に示された情報を統合したところから得られる解釈、つま

## 対象比較型ジョイントディスプレイ

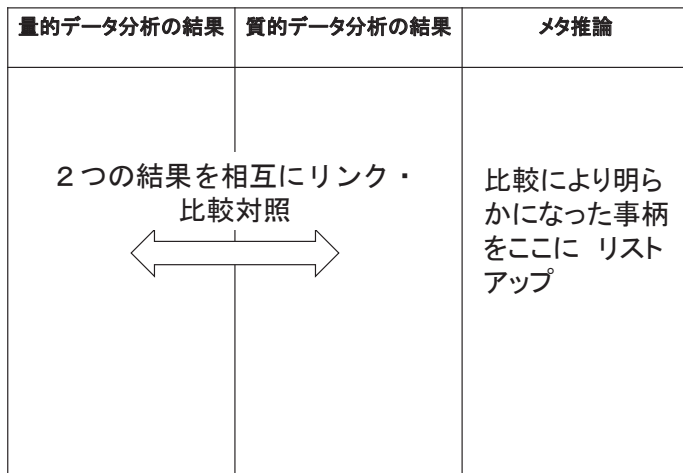


図 2. 計画・分析・報告ツールとしてのジョイントディスプレイ <sup>22)</sup>

りメタ推論を導き出します。または、ある種の属性（職業など）を有する人々を量的尺度によって比較し、それぞれの職業グループごとに得点のばらつきを箱ひげ図で示した上で、各グループの典型的語りを提示し、そこからメタ推論を導出するような方法もあります。これらの例は量的データの分析結果をもとに研究参加者をグループ分けしているのですが、インタビューデータの分析結果をもとに類型を生成し、それぞれの類型に当てはまる研究参加者が量的指標においてどのような特徴を有しているかを示すこともできます。

「結果追跡型ジョイントディスプレイ」は、量的研究で仮説を検証し、そこで明らかになったことをさらに深化するために質的研究を実施するという、いわゆる説明的順次デザイン用のジョイントディスプレイです。左端の列に量的研究結果を、中央の列にその結果を説明する質的研究の結果を、そして右端の列に全体から見てきた結論、つまりメタ推論を提示します。私はこの説明的順次デザインを用いて博士論文研究 <sup>23)</sup> を実施したのですが、論文執筆中の2000年前後の頃は、管見の限り、mixed methods research という呼称すら確立しておらず、ジョイントディスプレイという概念も普及しておりませんでし

た。したがって、私自身の博士論文にはジョイントディスプレイを入れていません。ところで、この研究で私は、最初に共分散構造分析を用いて文化的自己観の2つの因子と批判的思考態度の4つの因子の関係を検証し、その結果をもとに量的調査の参加者から合目的的に抽出した質的調査参加者に対し一対一のインタビューを実施しています。量的研究において明らかとなった構成概念間の関係は、後続のインタビュー調査により、さらに深く探究のメスが入れられています。混合研究法を用いることによって、マイノリティの学生が家庭環境の中で培ってきた相互協調的な価値観、態度、および認識論的あり方と、米国の高等教育で重視される批判的思考態度との間に乖離があることによって、この構成概念にはマイノリティの学生に対する文化的バイアスが潜んでいることを本研究は明らかにしています。

そして最後にご紹介するのは円形のジョイントディスプレイです。*Journal of Mixed Methods Research*に掲載された、外国語教育研究者による混合研究法を用いた事例研究論文<sup>24)</sup>の中でこの円形ジョイントディスプレイが使われています。この研究は、スペイン語教師を対象とした、テクノロジースキル向上のための教員研修プログラムの効果検証を、混合研究法を用いて実施したものです。曼荼羅図のようなこの円形ジョイントディスプレイは、もはや「アート」作品とも呼べるような非常にクリエイティブな図です。この円形ジョイントディスプレイでは、中心部分に量的データ分析の結果が示されています。そのすぐ外側の円には、質的研究により導出されたテーマが記載されており、これらは内側の量的研究結果に関連するものになっています。テーマが記載されたさらに外側の円の部分には、それぞれのテーマを表す典型的な語りの抜粋が記載されています。そして、外縁部分には、量的・質的データ分析の結果の統合が「収斂」、「拡張」、「矛盾」のいずれに至ったのかが示されています。

以上のように、現在ジョイントディスプレイは、混合研究法を用いる研究者の創造力(クリエイティビティ)と想像力(イマジネーション)を掻き立てるような研究実践になりつつあります。

## 5. まとめ

ここまでで、混合研究法の概要について駆け足でお話をさせていただきました

た。最後に、講演のポイントをまとめたいと思います。まずは本日の講演の締めくくりとして、改めて混合研究法の定義をご紹介します。この定義は Creswell と Plano Clark<sup>25)</sup> によるもので、本日私がお話しした混合研究法のトリロジー、つまり哲学、方法論、方法の3つの柱を文章化したものとしてご覧いただければと思います。

混合研究法とは哲学的前提および調査方法を兼ね備えた研究デザインの一形態である。方法論 (methodology) として、研究プロセスの多くの段階において質的・量的アプローチのデータ収集、分析、および混合の方向性を導く哲学的前提を備え、方法 (method) として、単一もしくはシリーズの研究において、質的・量的両方のデータを収集、分析、統合することに焦点を当てる。混合研究法がもつ重要な前提は、量的・質的アプローチを組み合わせることで、どちらか一方の研究アプローチを使用したときよりも研究課題に関するより良い理解が得られるというものである。

(Creswell & Plano Clark, 2007, p.5)

上記の定義の最後の部分にある下線部「より良い理解」がメタ推論ということになります。これがないと混合研究法にはならないというのは既にお話をさせていただきました。混合研究法の核は質的・量的データの「統合」にあり、これを研究のゴールに据えた研究手続き を採るか否かが、従来の質的・量的アプローチを併用した研究と一線を画す点であるといえます。

また、混合研究法を用いる場合、その理由付けを最初に検討する必要があります。なぜなら、単一の方法による研究アプローチを採る方が、研究目的を果たす上でより適切である場合もあるからです。とはいえ、複雑化する現代社会の諸問題を探求するということを考えますと、自ずと選択肢が混合研究法にならざるを得ないかもしれません。混合研究法というのは、複雑な現象をより良く理解する上で非常に有用なアプローチかと思います。

手続きダイアグラムや統合を可視化するジョイントディスプレイの使用が近年強く奨励されていることをお話しました。手続きダイアグラムというのは、

先程ご紹介させていただいたように、研究の流れを示した図です。混合研究法の複雑な手続きを読者が容易に把握する上で、また研究者が研究実施の複雑な流れを整理する上でも、手続きダイアグラムは非常に有用なツールといえます。そして、ジョイントディスプレイはシナジーによる新たな知（メタ推論）へのアクセスを支援する、研究の計画、分析、報告のそれぞれの段階で使用可能なツールです。ジョイントディスプレイは、混合型研究実践において、今後益々その重要性を増していくものと思われます。

混合研究法における方法論的厳密性は、「哲学的視座」から始まり、「研究目的／リサーチクエッション」、「デザイン」そして「統合の方法」のすべての鍵要素を論理的に繋げることで担保されます。ここに論理性がないと、この方法論的厳密性というのは担保されないということになります。

最後に、国際混合研究法学会前理事長で、カナダのアルバータ大学教授である Cheryl Poth 氏がつい先ごろ出版された *Innovation in Mixed Methods Research*<sup>26)</sup> に掲載された、私から混合研究法初学者の方々へのメッセージをご紹介します、本講演を閉じたいと思います。この書籍は、複雑な現象の解明に混合研究法をどのように利用することができるかを、研究事例を引きながら議論しています。Poth 氏は、世界中の mixed methods researcher から混合研究法初学者に向けてのメッセージ・コメントを集め、それらをこの書籍の中に掲載しておられます。このメッセージは、Poth 氏からの「混合研究法を実施する上でのアドバイスをお願いします」という依頼に対して、私がしたためたものです。このメッセージが皆さんのお役に立てば幸いです。

創造的かつ革新的に混合型研究をデザインしてください。但し、まずは質的・量的そして混合研究法の基礎を身につけるようにしてください。さもなければあなたは洋上に漂う錨のない船のようになってしまいうでしょう。

抱井 (Poth, 2018, p.46)

注

1) Japan Society for Mixed Methods Research

#### Guiding Tip 2.4



### **Hisako Kakai advising how to navigate the waters of mixed methods research**

Be creative and innovative in designing your mixed methods study. First, however, make sure to acquire the essential foundations of qualitative, quantitative, and mixed methods research. Without such foundations, you will be a boat drifting on the ocean without an anchor.

(Kakai cited in Poth, 2018, p.46)

- 2) Mixed Methods International Research Association
- 3) Fetters, M.D. & Molina-Azorin, J.F. (2017). The Journal of Mixed Methods Research Starts a New Decade: The Mixed Methods Research Integration Trilogy and Its Dimensions. *Journal of Mixed Methods Research*, 11 (3), 291–307. <https://doi.org/10.1177/1558689817714066>
- 4) Creswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2018). *Designing and conducting mixed methods research (3rd ed.)*. Sage.
- 5) Hesse-Biber, S. N., Rodriguez, D., & Frost, N. A. (2015). A qualitatively driven approach to multimethod and mixed methods research. In S. N. Hesse-Biber & R. B. Johnson (Eds.), *The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry* (pp. 3-20).
- 6) Tashakkori, A., & Teddlie, C. (2003). *Handbook of mixed methods in social & behavioral research*. Sage.

- 7) Morgan, D. L. (2007). Paradigms lost and pragmatism regained: Methodological implications of combining qualitative and quantitative methods. *Journal of Mixed Methods Research*, 1 (1), 48-76. <https://doi.org/10.1177/2345678906292462>
- 8) Mertens, D. M. (2007). Transformative paradigm: Mixed methods and social justice. *Journal of Mixed Methods Research*, 1 (3), 212-225. <https://doi.org/10.1177/1558689807302811>
- 9) Danermark, B., Ekström, M., Jakobsen, L., & Karlsson, J. C. (2002). *Explaining society: critical realism in the social sciences*. Routledge.
- 10) Johnson, R. B. (2017). Dialectical Pluralism: A metaparadigm whose time has come. *Journal of Mixed Methods Research*, 11 (2), 156-173. <https://doi.org/10.1177/1558689815607692>
- 11) マートンズ, D. M.・抱井尚子 (2019). 混合研究法セミナー報告：社会改善を志向する変革的混合研究法. *Aoyama Journal of International Studies*, 6, 1-19.
- 12) Fetters, M.D., & Freshwater, D. (2015). The 1+1=3 integration challenge. *Journal of Mixed Methods Research*, 9 (2), 115-117. <https://doi.org/10.1177/1558689815581222>
- 13) Creswell, J.W., & V. L. Plano Clark (2007). *Designing and Conducting Mixed Methods Research (1st ed.)*. Sage.
- 14) Teddlie, C. & Tashakkori, A. (2009). *Foundations of mixed methods research: Integrating quantitative and qualitative approaches in the social and behavioral sciences*. Sage. (テドリー, C.・タシャコリ, A. 土屋敦・八田太一・藤田みさお (訳) (2017) 混合研究法の基礎 西村書店)
- 15) Greene, J. C., Caracelli, V. J., & Graham, W. F. (1989). Toward a conceptual framework for mixed-method evaluation designs. *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 11 (3), 255-274. <https://doi.org/10.2307/1163620>
- 16) Caracelli, V.J., & Greene, J.C. (1993). Data Analysis Strategies for Mixed-Method Evaluation Designs. *Educational Evaluation and Policy*

- Analysis*, 15, (2), 195-207. <https://doi.org/10.3102/01623737015002195>
- 17) Creswell, J.W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Sage. (クレスウェル, J.W. 抱井尚子 (訳) (2017) 早わかり混合研究法 ナカニシヤ出版)
- 18) Creswell, J. W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Sage. (クレスウェル, J. W. 抱井尚子 (訳) (2017) 早わかり混合研究法 ナカニシヤ出版).
- 19) Creswell, J. W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Sage. (クレスウェル, J. W. 抱井尚子 (訳) (2017) 早わかり混合研究法 ナカニシヤ出版).
- 20) Fetters, M. D. (2020). *The mixed methods research workbook: Activities for designing implementing, and publishing projects*. Sage.
- 21) Fetters, M. D., Curry, L. A., & Creswell, J. W. (2013). Achieving Integration in Mixed Methods Designs—Principles and Practices. *Health Services Research* 48 (6), 2134- 2156. <https://doi.org/10.1111/1475-6773.12117>
- 22) Fetters, M. D. (2020). *The mixed methods research workbook: Activities for designing, implementing, and publishing projects*. Sage.
- 23) Kakai, H. (2001). *The effects of independent and interdependent self-construal on the development of critical thinking dispositions: A quantitative and qualitative study* (UMI Micro-form No. AAI 3017402).
- 24) Bustamante, C. (2019). TPACK and Teachers of Spanish: Development of a Theory-Based Joint Display in a Mixed Methods Research Case Study. *Journal of Mixed Methods Research*, 13 (2) 163–178. <https://doi.org/10.1177/1558689817712119>
- 25) Creswell, J. W., & V. L. Plano Clark (2007). *Designing and Conducting Mixed Methods Research (1st Edition)*. Sage.
- 26) Poth, C. N. (2018). *Innovation in mixed methods research*. Sage.